

【地域情報】

## 人魂か？火の玉か？不思議な遭遇の記録

——誰かが見た、あの不思議な光のこと——

平井亜未\*・加藤寛之\*\*

キーワード：火の玉、人魂、墓、遭遇、目撃

加藤寛之

人魂というと、夜の墓地で青白い火を放ち、尾をひいてふわりふわりと漂う妖しい光の球というイメージだが、私は見たことがない。狐の嫁入りとか天狗が灯す火<sup>1)</sup>と何が違うのかと問われても、これも見ていないから返事ができない。だが、このような妖しい光を見たと言っている人は何人もいるのだから、文字でしか知らない私が見たことを疑問視するのもおかしな話だと思う。

本稿は、なるべく城西大学周辺といえる範囲や、城西大学の近隣にお住まいだったとみられる方々の人魂かもしれない妖しい光の目撃情報からいくつかを拾っている。それが人魂だったのか別種の光の球なのかは確認できないし、そもそも何だか分からないのだから呼称や表現も定まらない。突然に現われるものだし、出現記録をメモしているわけでもないので、いついつ・どこどこの出来事だと精緻なデータを求めることも無理である。そのあたりはユルく受け入れていただきたい。

さて、人魂に対する科学的のような見解の一つに、人魂はお亡くなりになった方の肉体から出たリンが燃えるのだという説がある。この説ならば、出現する場所は墓地近辺であり、土葬であることが必須条件になる。現代の日本では火葬が一般的だろうから、これは近年に人魂の目撃情報が激減している理由にもなる。

一例として、太平洋戦争前の埼玉県飯能町で土葬・火葬はどのくらい行なわれていたのかを確かめたい。飯能町が火葬場を開設したのは、1928（昭和3）年である。それ以前は設備と称すべき何物も無く、火葬場の開設まで法定伝染病死亡者の火葬強制以外の火葬はほぼなかったという。火葬場完成

年別	土葬	火葬
1914	128	6
1915	133	4
1916	146	2
1917	167	6
1918	158	3
1919	157	6
1920	226	11
1921	158	3
1922	163	4
1923	182	13
1924	183	18
1925	180	9
1926	182	14
1927	176	8
1928	199	27
1929	132	32
1930	142	33
1931	224	44
1932	146	31
1933	151	57
1934	154	45
1935	152	31

表1 飯能町の土葬火葬件数推移  
小室太一編『衛生的展望下の飯能』43頁から作成

\* 城西大学広報課事務職員

\*\* 元城西大学広報課課長

で火葬は増加したが、大部分は土葬だった<sup>2)</sup>。筆者の地元（飯能市精明地区双柳）では、1960年代半ばでも土葬が普通にみられた。

なお、飯能町では1916（大正5）年から1917（大正6）年ころにスペイン風邪が大流行した。医師で対応にあたった小室太一は「忽ち肺炎を起して、バタバタと死んで仕舞」ったとしているが、数値でみると土葬・火葬数ともに顕著な変化は見られない<sup>3)</sup>。その理由はわからないが、当時の飯能町は今日の飯能市のほぼ市街地部分に相当する地域で、小室医師はより広い範囲で診療活動を行っていたようだから、そこに実感との違いが生じるのかもしれない。

ここからは、人魂や火の玉の目撃情報だ。

最初は、子ノ権現天龍寺の住職が太平洋戦争中に見たという火の玉から。まだ住職でない若いころという。

満願の日の早朝、手燭を持って、まだ暗い廊下を本堂へ行こうと階段を上ると、前方三メートルぐらいに直径約十センチの火の玉が浮かんでいた。始めはだれかのいたずらかと思ひ、近寄ってよく確かめようとする、火の玉はつねに三メートルの間隔を保って後ろへさがる。こちらが早く行くと早く、ゆっくりするとゆっくり走る。よく見ると中心は赤いが、周囲は同心円の七色の不思議な光球なのである。そして鍵のかかっている本堂の中へ入るように消えていった。住職は狐か貉が化けたのかもしれないと思ひ、急いで本堂に入り扉を閉じて、逃げられないようにして調べたが何もなかった。

かなりリアルな目撃情報である。子ノ権現天龍寺は飯能市の山地にあって、戦前からハイキングで訪れる観光地でもある。これを採録した神山弘はいわゆる奥武蔵を歩き回りその魅力の紹介に尽力された方である。目撃は満願の日とあるので、子ノ権現天龍寺で調べれば年月日まで判明するかもしれない。なお神山氏は、信じる信じないは読者次第としている<sup>4)</sup>。

子ノ権現天龍寺は山の中だが、飯能市の平地部でも火の玉を見た人がいる。飯能市の地域新聞である「文化新聞」1954年8月23日に、現在の飯能市加治地区川寺での火の玉目撃情報がある<sup>5)</sup>。寄稿者は、飯能市出身の古美術及び心理学研究家を自称するT氏<sup>6)</sup>で、子供のころに聞いた話とある。掲載文は長いので要約して紹介する。目撃者はFさんとしておく。

飯能の街から東南へ十五丁程、名栗川の橋を渡った所に、川寺という村がある。その村にFさんという男がいた。夏の日暮れのこと、ほろ酔い機嫌で我が家の方へ歩いてゆくと、稲田の中からフーッと何かが出た。「ハテナ？」と思つてよく見ると、絵にかいた人魂のようなものが妙な格好でふわふわしながら浮遊してゆく。小走りで後を追ってゆき、一本松の所へ追ってきた。途端にその青い火の玉が下の方へ降りてきた。彼は半纏をかぶせた。火の玉を生け捕る考えで端の方から少しずつ開けてみたが、青い火の玉は全然影さえない。

名栗川は、現在では一般に入間川と称される川のこと。この火の玉は青い。出現場所は稲田とあり、

墓地ではない。一本松は、その松の木を7廻り半まわると狐が出るとか、息を止めて3回まわると蛇がでるとかの伝説のある場所。現在もそこに西武バスの「一本松」バス停があるから、場所は明確だ<sup>7)</sup>。ほろ酔い機嫌というところが気になるが、そこは問わないでおこう。

寄稿者のT氏自身も火の玉を数回見たようで、T氏が荻窪に住んでいたときらしい2つの目撃を別の寄稿で紹介している。荻窪だから、今では都会といえる。これらも要約して紹介したい。

1942（昭和17）年10月13日午後6時頃、荻窪駅から一丁目の我が家へ帰る途中の二丁目の坂道で、本田という風呂桶屋の二階の屋根の上あたりから、鮮やかな翠緑色をした火の玉が青白い尾を長くひいて、す〜と十三間道路を横切り向こう側の瓦葺屋根のあたりでフツと煙のように消えた。消えた瞬間、寒いものが電流のように背筋を走ったのを感じた。

1948（昭和23）年8月の夜の10時頃、サイレンに驚いて門の外へ出た。隣の大学生も出た。火は見えず、消防車はすぐに帰ったようで、自分たちの家に戻ろうとしたとき、半丁ほど先の瓦葺平屋の屋根のあたりにふッと赤い火が見える。その火の玉は夜空に向かってふわふわと、まるで昔の画家が画いた人魂の絵のと通りの格好で青い尾をかすかにひきながらふわふわと闇の中へ消え去った。その後、その火の玉の出た家の主婦の母親が、ちょうどその時に故郷で亡くなったそうである。

どちらも、いつ・どこでがかなり明確だ。前者の火の玉の色は翠緑色で青白い尾がある。寒いものが電流のように背筋を走ったところはいかにも人魂っぽい、出現場所は市街地。後者は火災で飛んできた燃えカスだった懸念はあるが、赤い色で青い尾。動きはいかにも人魂っぽい、人の魂が漂ったのかと思わせる出来事も付随している<sup>8)</sup>。

T氏が心理学研究者であることに引っかけられる方もおいでだろう。「文化新聞」には、現在の日高市で小中学校の校長まで務めた理系らしい先生の寄稿もあるので紹介したい。ここではM先生としておく。M先生の該当する寄稿は「文化新聞」1968（昭和43）年9月5日にある<sup>9)</sup>。寄稿文は最初に人魂に対するM先生の見解を語り、続いてM先生が目撃情報、さらに教え子からの話と3本だてである。学校の先生らしく理性的な解釈を冒頭に置いているのが興味深い。読みやすくしたうえで、要約で紹介したい。

墓地で青いリンの燃えることは誰も知っているであろう。理科の実験でリンを燃したりするから。アルコールを燃しても同じように青い炎を上げて燃える。人骨に含まれているリンが水を得て燃えるのは、青く不気味である。

あるとき私は、切通しの坂道を登っていくと両側とも墓地でおあつらえ向きに小雨が降って真の闇である。ここは墓地だと思ったとき、私の目の高さで墓地の高さがほとんど同じになったとき、ふと見ると青白いリンが幽霊式に地面から離れて燃えているのである。なかなかのショックであった。

あるお寺に寄宿していた教え子からの話として聞いてください。「お化けが出たか」「人魂はどうだ」などとやたら聞く。

「人魂なんか始終見るさ」

「怖いかな？」

「怖くない」

「どんなときに出る？」

「風のない曇った晩が多い」

「ある和尚さんが人魂を捕まえて紙の袋に入れ本尊さまの前へあげてお経を読んだというがな。慣れるとなんでもなくなるのかもしれないな」

「うんとおっかなかったことがあったぜ。俺がな、夕方、跳ねつるべで水を汲んでザアーッと手桶にあけて、竿を下ろそうとしたらな、そのつるべの竹ざおと俺の鼻の間を人魂が通り抜けたんだ。そのとき人魂を犬も見て吠えたから人間ばかりじゃない、犬にも分かるということがわかったよ、先生。あれは魂の踊りだんべいかな、先生だってリンの燃えることは知ってるべ。俺が見たのはリンではないんだ。雨の降っている、しょぼしょぼ降っている晩のことだ。お墓の上が少しぼうっと明るくなったので思わず見ていると、丸い外の方は青白いくせに中の方は赤っぽいふわふわした感じの丸い奴がぶらぶら揺れながら出てくる。お墓の中からだんだん、かぶりを振るように出てくる。洗面器くらいのふわふわが、揺れながらお墓の土の上を十センチぐらい。その鬼火の仲間のような火の玉が離れると、今度はまた揺れながらお墓の中へ入ってしまうんだよ。真っ暗になったときがぞうっとするんだ」

「それはちょいちょい出でるか」

「いや、めったに出ない」

M先生は、周囲が墓地で小雨のときに目撃している。M先生だけあって燃えているものをリンと断定したうえで、ショックを受けたとしている。理性的解釈と心理状態は違ったようだ。教え子からの話とあるが、これは10年あまりM先生の家で暮らした方から聞いた話をボカして書いたようにも思える<sup>10,11)</sup>。仮にそうであるならば、このやりとりは戦前の話である。

両者は火の玉の出現に、風のない曇った晩とか雨の降っている晩、井戸といった湿気との関連をうかがわせることで共通している。また、ショックを感じたり、ぞうっとしたりと、精神面に影響することも共通している。教え子は、犬が吠えたことに言及して、個人の幻覚でない証拠にしている。またM先生自身はリン説の立場であり、子どもにリンの燃える様子を見せてあったようだが、そのためだろう教え子は俺が見たのはリンではないと証言している。

最後にこれはどうだろうか。この話は「文化新聞」1975（昭和50）年7月13日にある<sup>12)</sup>。約50年前の出来事で、人魂の目撃場所は飯能市の市街地、しかも人魂が真白な着物をきた女とともに出現している。要所に絞って紹介したい。

「今月初の雨のシトシトと降る夜八時ごろ、市民体育館前を男女六名のいずれも二十歳前後のグループ、近くに住むKさん宅を訪ねる途中だった。たまたま体育館にさしかかったところ、同館

内部から異様な女性ので「ギャーッ」という悲鳴に似た声に六名は足を止め、中の気丈なS君が「体育館内で何かあったらしい。俺がみてるから」と体育館に走り込んだ。とたん、S君何かに追われるかっこうで一行の許へ逃げ込むと「早く逃げろ」と先頭に立ってK君の家へ走り出した」。

「顔面蒼白となったS君あたりを見廻し、声を殺していわく「まったくこわかった。体育館内のくらやみから、いきなり人魂が現われ、とたんに真白な着物をきた女が恐ろしい顔をして、俺を目がけて追ってきたんだ」とふるえながらの話しに、K君はじめ他の五名も何か背すじに水が流れる思いとなった」。

記事では、このあとにK君もこの女性を目撃している。ここでいう市民体育館は現存しており、飯能市立飯能第一小学校の体育館がそれである。記事は「この話、信じようと、信じまいと、それは読者の自由である」と締めているが、筆者も筆者の友人もこの出来事やウワサに記憶がないので真偽を論じにくい。

さて、私の印象に過ぎないが、最近是人魂とか妖しい光、火の玉といった類いが身の周りで話題になることはあまりない。少なくとも私はしばらく聞いていない。それが実際に出現していないからなのか、報道されないだけなのか、話題にしないだけなのか、それも分からない。生活の場が明るくなりすぎて、出現しても光量不足で見落としているだけかもしれない。いずれにしても、それほど遡らない時代の人（最後の市民体育館のケースになると筆者と同世代だ）が、人魂とか妖しい光、火の玉といった類いをわりと頻繁に目撃できる中で生きていたことは間違いない。そして見たと言っているのだから、そのときに存在したと考える方が素直だと思う。

新たに平井氏が採録した「江田おじさんの話」も、そんな遭遇の貴重な記録である。一つは人魂、一つは不思議な光である。氏の実体験として受け入れていただければ幸いである。

#### 参考文献

- 1) 神山弘 (1951) 『ものがたり奥武蔵』奥武蔵研究会, pp. 13-47.
- 2) 小室太一 (1936) 『衛生的展望下の飯能』飯能町衛生組合 組合報編輯部, pp. 42-44.
- 3) 小室太一・原田雅義 (1983) 『記憶をたどりて』 pp. 37-39.
- 4) 神山弘 (1985) 『秩父・奥武蔵 山と伝説の旅』金曜堂出版部, p. 54.
- 5) 「文化新聞」1954年8月23日
- 6) 「文化新聞」1954年9月9日
- 7) 「文化新聞」1981年4月11日
- 8) 「文化新聞」1954年8月22日
- 9) 「文化新聞」1968年9月5日
- 10) 「文化新聞」1955年3月11日
- 11) 「文化新聞」1955年2月27日
- 12) 「文化新聞」1975年7月13日

国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承データベース

Web ページ : <https://www.nichibun.ac.jp/cgi-bin/YoukaiDB3/simsearch.cgi?ID=0470039>

## 資料

聞き書き 平井亜未

話 江田おじさん (秩父市)

聞き取り時期 2025年7月17日

聞き取り方法 電話

私（平井亜未）は例のごとく地域の不思議な話を集めていて、「誰か面白い話を知っている人いな  
いかな」と家族で話していたときに、父と母の高校時代からの友人である江田おじさんの名があが  
った。

江田おじさんは地元・秩父市の出身で、かつて中学校の先生をしていたけれど、私の中では「先  
生」というよりもいつも山や川に出かけている人という印象が強い。秩父の山や溪流を歩き、釣りに  
行くのが日常のような人で、趣味は溪流釣り。おしゃれに装備をそろえるタイプではなく、どちらか  
といえばサバイバルに近い山男気質。自然の中に溶け込むように過ごすのが性分で、うちの祖父とも  
よく釣りや山の話で盛り上がっていた。

私が幼い頃、夏休みなどに帰省した際には、よく家族と一緒に川に遊びに行ったり、父の実家に遊  
びに来てくれたりした。父よりも祖父母の家に顔を出してくれるような人だった。江田おじさんが祖  
父のことを「おじさん、おじさん」と慕っているのが、子どもながらに何だか可笑しかった。おじさ  
んがおじさんって呼んでる、その響きが不思議で印象に残っている。

父はそんな江田おじさんのことをただ「江田」と呼び、母は「江田くん」と言っていた。家の中で  
“おじさん” “くん” “江田” が入り混じっていて、それぞれの呼び方にその人なりの親しさがにじん  
でいた。

そんなおじさんなら、きっと何か面白い話を持っていると思い、2025年7月17日、「不思議な話な  
い？」と電話をしてみた。

江田おじさん 「俺が小さい頃、家のそばの公園あたりを歩いていたときにね……あ、今と違って、  
昔の公園はすごく暗かったんだよ。そのとき、ヒトダマがひゅーって飛んでいるのを見たんだ。で、  
そのあとに、床屋のおじさんが亡くなったって聞いたんだよね。」

私 「何色だったんですか？」

江田おじさん 「ヒトダマって赤じゃなかったんだよね。青っぽい色だったんだよ。」

それからもう一つ…、大滝の『げんき村』<sup>1</sup>ってところがあるんだけど、あそこで中学生の林間学

---

1 当時の「大滝グリーンスクール」(現・埼玉県立大滝げんきプラザ)のこと。

校のとき、夜に肝試しみたいなことをしたんだよね。そのとき、山の下の方からオレンジ色の光が右、左と揺れながら動いていたんだよ。小さい光だったんだけど、それを見ていたら、だんだんだんだんと上の方に上がってきてね。『あれ、これはヤバイな』と思って逃げたんだよ。だから最後までは見えていない。近くまで上がってくる前に逃げちゃったんだ。でもね、その時ひとりじゃなかった。実習生の女の子も一緒に見ていて、その子も一緒に逃げたんだ。だから目撃者は俺だけじゃないんだよ。そんなことがありました。』

二つの目撃談はいずれも光の色が異なり、しかも複数人による確認がある点が印象的である。秩父の山間部は夜の闇が濃く、昔から霊火や人魂の伝承が多い地域だ。

江田おじさんの語りには、そうした地域の記憶と、自然とともに生きる人の実感がそのまま息づいていた。